環境γ線解析用 49x49 応答行列の紹介

湊 進

放射線地学研究所



放射绿地学研究所、名古屋

環境γ線解析用 49x49 応答行列の紹介

放射線地学研究所 湊 進

1. はじめに

環境 γ 線用 3" ϕ x3"NaI(Tl)シンチレータの応答行列を初めて製作して ¹⁾ から早 45 年が 経つ。この応答行列は線量率評価のみが目的であったため、試作版として 30x30 等間隔行 列を製作したのであった。

その後、カリウム(K)、ウラン(U)、トリウム(Th) 濃度も評価できるように改良を試み た。当時、市販の NaI(Tl)の分解能は Cs-137 からの γ線 (0.662 MeV) に対して 9~10% が普通であった。また、波高分析器も 256 チャンネル以下が主流であった。応答行列のエ ネルギー・ビン巾は半値幅ていどが良いとされており、分布のビン分けもチャンネル数が 少ないほどビン巾を広くとる必要があった。そのため、改良版として 22x22 不等間隔行列 を製作し K (K-40:1.464 MeV), U (Bi-214:1.765), Th (Tl-208:2.615) のピークがそれぞれ 一つのビンに収まるように工夫したのであった²。

その後の光電子増倍管の性能向上により、現在では分解能 7%以下のものが常識となっている。チャンネル数も 1024 以上が普通に使われている。今の時代に合うよう応答行列の要素数を大幅に増やすことにした。

2. 設計

表1はK-40, U-, Th-系列の核データである。これを基に設計する。基本方針は

Parent	Gamma		Gammas emitted				
Nuclide	Enersy	Source	per parent				
	(keV)		disintegration				
238	186	²²⁸ Ra	0.034				
	242	²¹⁴ Pb	0.070				
	295	²¹⁴ Pb	0.179				
	352	²¹⁴ Pb	0.350				
	609	²¹⁴ Bi	0.430				
	768	²¹⁴ Bi	0.048				
	1120	²¹⁴ Bi	0.145				
	1765	²¹⁴ Bi	0.147				
	2205	²¹⁴ Bi	0.047				
²³² Th	240	²¹² Pb+ ²²⁴ Ra	0.490				
	338	²²⁸ Ac	0.129				
	463	²²⁸ AC	0.047				
	727	²²⁸ AC	0.079				
	911	²²⁸ Ac	0.290				
	966	²²⁸ AC	0.230				
	1588	²²⁸ AC	0.046				
	510	208T	0.096				
	583	²⁰⁸ T I	0.300				
	860	²⁰⁸ T	0.047				
	2615	²⁰⁸ T I	0.360				
40K	1461		0.107				

表1 自然放射性核種データ

ビン巾を半値幅ていどにすることと、表1に示されている γ 線それぞれをなるべく一つの ビンに収めることである。このようにして振り分けた結果が**表2**である。K-40のエネル ギーについてはこれまで Beck et al.³⁾の値 1.464 MeV を使っていたが、今回からは 1.461 MeV を使うことにした 4 。

表	2 3″≰	>× 3″NạI(ロ)のビン	ノ分け(0	.6616Me	V分解能	を7% Q=0.34とする)
	_			F 4			K1 11 1
Bin No.		Resolution		EL	E2		INUCIIDES
1		70 1 E E 1 4					
	0.0025	10.014	0.010	0.050	0.075	0.0250	
2	0.0870	10.320	0.012	0.075	0.100	0.0200	
3	0.1120	11.040	0.014	0.100	0.120	0.0250	
4	0.1375	11.942	0.010	0.120	0.150	0.0250	
0	0.1025	11.283	0.018	0.150	0.175	0.0250	
0	0.1875	10.747	0.020	0.175	0.200	0.0250	
/	0.2140	10.274	0.022	0.200	0.228	0.0280	
8	0.2400	9.882	0.024	0.228	0.252	0.0240	Pb=212 & Ra=224
9	0.2000	9.535	0.025	0.252	0.281	0.0290	
10	0.2950	9.212	0.027	0.281	0.309	0.0280	Pb=214
10	0.3230	8.932	0.029	0.309	0.337	0.0280	[Ac=228;U.338MeV]
12	0.3520	8.675	0.031	0.337	0.367	0.0300	Pb=214
13	0.3865	8.404	0.032	0.367	0.406	0.0390	
14	0.4255	8.133	0.035	0.406	0.445	0.0390	[4 000 0 400 4 V d
15	0.4675	1.811	0.037	0.445	0.490	0.0450	LAC-228:0.463MeV1
16	0.5100	7.648	0.039	0.490	0.530	0.0400	II-208,[泪滅尤子, U.511MeV]
1/	0.5570	1.422	0.041	0.530	0.584	0.0540	
18	0.6110	7.192	0.044	0.584	0.638	0.0540	TI-208;0.583MeV, Bi-214;0.609MeV
19	0.6615	7.000	0.046	0.638	0.685	0.0470	Cs=137
20	0.7065	6.845	0.048	0.685	0.728	0.0430	[Ac-228;0.727MeV]
21	0.7490	6.711	0.050	0.728	0.770	0.0420	[Ac-228;0.727MeV]
22	0.7960	6.573	0.052	0.770	0.822	0.0520	Cs-134
23	0.8540	6.418	0.055	0.822	0.886	0.0640	[TI-208;0.86MeV]
24	0.9110	6.279	0.057	0.886	0.936	0.0500	Ac-228
25	0.9660	6.155	0.059	0.936	0.996	0.0600	Ac-228
26	1.0190	6.044	0.062	0.996	1.042	0.0460	
27	1.0645	5.955	0.063	1.042	1.087	0.0450	
28	1.1200	5.853	0.066	1.087	1.153	0.0660	Bi-214
29	1.1867	5.739	0.068	1.153	1.220	0.0673	
30	1.2539	5.632	0.071	1.220	1.288	0.0672	
31	1.3211	5.533	0.073	1.288	1.355	0.0672	
32	1.3884	5.441	0.076	1.355	1.422	0.0673	
33	1.4610	5.347	0.078	1.422	1.500	0.0780	K-40
34	1.5370	5.256	0.081	1.500	1.574	0.0740	
35	1.6105	5.173	0.083	1.574	1.647	0.0730	[Ac-228;1.588MeV]
36	1.6840	5.095	0.086	1.647	1.721	0.0740	
37	1.7650	5.014	0.089	1.721	1.809	0.0880	Bi-214
38	1.8520	4.933	0.091	1.809	1.895	0.0860	
39	1.9385	4.857	0.094	1.895	1.982	0.0870	
40	2.0245	4.786	0.097	1.982	2.067	0.0850	
41	2.1105	4.719	0.100	2.067	2.154	0.0870	
42	2.2050	4.649	0.103	2.154	2.256	0.1020	Bi-214
43	2.3060	4.579	0.106	2.256	2.356	0.1000	
44	2.4070	4.512	0.109	2.356	2.458	0.1020	[Bi-214;2.448MeV]
45	2.5080	4.450	0.112	2.458	2.558	0.1000	[Bi-214;2.448MeV]
46	2.6150	4.387	0.115	2.558	2.672	0.1140	TI-208
47	2.7290	4.324	0.118	2.672	2.786	0.1140	
48	2.8930	4.239	0.123	2.786	3.000	0.2140	
49	3.1000	4.140	0.128	3.000	3.200	0.2000	

表中、FWHM が半値幅、E1, E2 はビン端のエネルギー、 ΔE がビン巾である。半値幅をW、分解能をrで記すと、それぞれの変数には次の関係がある⁵⁾。

$$r(E) = \frac{W(E)}{E} \times 100 \quad (1)$$
$$r(E) = r(E^*) \left(\frac{E^*}{E}\right)^{\varrho} \quad (2)$$

ここで E* は標準エネルギー(例えば Cs-137 の 0.662MeV) である。(1),(2)式により求め た半値幅と、製作した行列のビン巾の関係を図1に示す。2.786 MeV 以上のビンは宇宙線 寄与分を差し引くために設けてある。



3. 行列の計算

モンテカルロ計算プログラム SPHERIX⁶⁾ を仕様変更して 2" \$ x2" および 3" \$ x3"



NaI(TI)シンチレータ用の 49x49 行列を計算した。 γ線が検出器に等方に入射する条件で 1 行あたり 100 万ヒストリーを追跡した。図2 が計算結果である。

4. アンフォールディング

図3に波高分布の1例を示す。これまではK-40とTl-208(2.615 MeV)でエネルギー 校正をしていた。今回からはそのほかにモナザイトの砂浜やウラン鉱床、フォールアウト 場を意識して、エネルギー校正用のピークを増やした。



この波高分布をアンフォールディングしたものが図4である。表1に示した核種の多く



がスペクトルの一つのビンに収まっているのが分かる。

図の中で"Natural"と記してある青線は K-40 (1.461 MeV), Bi-214 (1.765 MeV) および Tl-208 (2.615 MeV) のピークで規格化したスペクトルである。

記号の意味は

D_{si}:スペクトルのエネルギービンごとに定数を掛けて求めた線量率

D_{cf}: K (ビン番号 33), U (37), Th (46)から求めた濃度に以下の換算係数を掛けて算出した自然 y 線量率 ³⁾

$$D_{cf}(nGy/h) = 13.0K(\%) + 5.4U(ppm) + 2.7Th(ppm)$$
(3)

 K
 : K 濃度、
 U
 : U 濃度、
 Th: Th 濃度

 である。従って D_{si} - D_{cf} は人工成分を表す。

図5に単位濃度あたりの基準線束スペクトルを示す。MONARIZA/G2 コード ⁿ で 100 万ヒストリーを追跡した結果である。これも表1と比べてみて欲しい。



ここまでの結果は22x22行列と同様に逐次近似回数20回で計算している。

新行列の最適逐次近似回数を決めるために二つの波高分布について調べたものが表3で ある。表を見ると逐次近似回数は20回で十分収束することが分かる。

分解能は検出器ごとに異なる。アンフォールディング・コードには試行錯誤法で迅速に

最適分解能を求める機能が内蔵されている⁵。ソフトを販売する場合は自然γ線の波高分 布を発注者から送ってもらい、当所で最適分解能を決めてから出荷している。

才	さ 珍沢	虹似回致	テスト										
2" \$ x2"	512channel						3″ \$ x3″	1024channe	 				
gr2							gr3						
Rk=5.1%							Rk=4.5%						
No. of Iteration	Dsi(nGy/h)	Dsi/Dcf	Dsi-Dcf	K(%)	U(ppm)	Th(ppm)	No. of Iteration	Dsi(nGy/h)	Dsi/Dcf	Dsi-Dcf	K(%)	U(ppm)	Th(ppm)
1	148	1.31	35.100	2.51	5.35	18.9	1	114	1.210	19.700	3.60	3.35	10.8
2	129	1.17	15.000	2.72	4.22	19.5	2	103	1.080	7.910	3.72	3.09	11.0
3	127	1.12	13.200	2.89	4.24	19.6	3	101	1.040	4.030	3.77	3.28	11.1
4	126	1.08	9.640	2.95	4.56	19.7	4	100	1.020	2.020	3.78	3.49	11.1
5	126	1.06	6.900	2.96	4.97	19.7	5	100	1.010	0.889	3.79	3.65	11.1
6	126	1.04	4.860	2.96	5.31	19.8	6	100	1.000	0.251	3.79	3.74	11.1
7	126	1.03	3.440	2.96	5.56	19.8	7	100	1.000	-0.100	3.79	3.79	11.1
8	125	1.02	2.490	2.96	5.72	19.8	8	100	1.000	-0.310	3.79	3.82	11.1
9	125	1.02	1.880	2.95	5.83	19.8	9	100	1.000	-0.430	3.79	3.84	11.1
10	125	1.01	1.510	2.95	5.89	19.8	10	100	0.995	-0.500	3.79	3.84	11.1
15	125	1.01	0.971	2.95	5.98	19.8	15	100	0.994	-0.630	3.79	3.86	11.2
20	125	1.01	0.910	2.95	5.98	19.8	20	100	0.993	-0.670	3.79	3.87	11.2
25	125	1.01	0.892	2.95	5.98	19.8	25	100	0.993	-0.690	3.79	3.87	11.2
30	125	1.01	0.877	2.95	5.98	19.8	30	100	0.993	-0.700	3.79	3.87	11.2

表3: 逐次近似回数テスト

5. 自然γ線に対する新旧コードの比較

図6は今回製作した49x49行列と従来の22x22行列でアンフォールドしたスペクトルの比較である。この過程で線量率、K,U,Th濃度が計算される。これも比較してみよう。



図7がそれである。U濃度以外は両者の一致は非常に良い。旧コード(22x22)ではU濃度の評価にはビン番号16(1.765 MeV)と18(2.205)を使う場合と16のみのものの二つの方法があった。図を見ると両者の平均くらいがちょうど良いようである。これについてもう少し検討してみる。理解しやすいように同じ波高分布に対して二つの方法でU濃度を評価した例を図8に示す。この場合も両者の差は大きい。

U濃度の評価誤差には二つの原因が考えられる。一つは単位濃度あたりのUによる基準 線束スペクトルの計算誤差である。もう一つはU+Thスペクトルから差し引かなければな らないThに関する基準線束スペクトルの計算誤差である。





Uの精度評価にはThの影響をあまり受けない事例を調べればよい。ここではU鉱石 (人形石)を照射する、検出器の下方を鉛で遮蔽して降水中のラドンを測る、あるいは上 空のラドンを測る、などが実験可能である。表4がその結果である。DEF3C2がビン番号 16と18を使った場合、DEC3C2-16が16のみを使った場合である。表4によれば両者の 差はきわめて小さい。このことから、誤差の原因は基準Th線束スペクトルの精度に問題 があると言えそうである。

表4 ウラン系列試料							
		(ppm)					
Nigyoite	25.2	25.0					
Rain (Pb) Radon (Pb)	0.83	0.79 0.67					
(Pb):下方2π鉛遮蔽							

6. 人工成分に対する新旧コードの比較

全体のスペクトルから K, U, Th 濃度で規格化した自然起因スペクトルを差し引いたものが人工成分である。この方法は K-40 以上のエネルギーの人工成分が混入している場合には誤差を伴う。

フォールアウト場を例にして説明する。図9に例を示す。この場合はCs-134 (0.796 MeV)とTI-208 (2.615 MeV)の光電ピークでエネルギー校正をする。



図10がそのアンフォールディング結果である。図中左のDsi-Dcfが人工成分を表す。



環境セシウム専用コードを使うと図 11 に示すようにセシウムに特化した解析もできる。 ビン番号 14 (0.4255 MeV)と 23 (0.8540) を対数直線で結び、19 (0.6615) の青四角部分 から Cs-137 の一次線を, 22 (0.7960) 青四角部分から Cs-134 の一次線を評価する。直線 より下の部分は Cs-(134+137)の散乱線と見做す。



図 10 に示す解析を新旧コードで実施した結果が図 12 である。線量率の低い例だけを選



んだ理由は、線量率が非常に高いと自然起因成分が無視できるので弁別テストにならない からである。

最後に留意点を二つ挙げておく。一つは、福島第一原発事故由来のフォールアウト場は 2011 年 5 月以降のデータにのみ有効である。そうでないと Cs-134、Cs-137 以外の核種 (特に I-132) の存在により K, U 濃度が過大評価される。2011 年 3~4 月のデータにつ

いては別の専用コード®を利用する必要がある。

二つ目は、セシウムのみの場であっても数µGy/h以上の場合は、検出器の分解時間の関係上パイルアップが生じ、誤差が大きくなる。K,U濃度が過大評価されるのである(図13参照)。



人工成分の弁別について、もう少し詳しく注釈をする。人工成分の線量率が高すぎて、 パイルアップにより Tl-208 (2.615 MeV)のピークが識別できない場合にはこのコードは使 えない。エネルギー校正ができないからである。

本コードは K (ビン番号 33), U (37), Th (46)の計数率から(3)式により自然線量率を算出 している。そのため、これらのビンに人工成分やパイルアップ分が混入していると誤差を 生ずることは直前で述べた。では、何を目安にこれらのビンに人工分が混入しているかを 判断すべきなのか?を以下に実例で示す。自然線量率は K, U, Th 濃度で決定されるが、フ ォールアウトが無い自然由来のみの γ 線場では Th 濃度ともかなり良い相関を示す。図 14 がその様子である。Th-系列の Tl-208 (2.615 MeV)のビン(番号 46) に対するフォールアウ ト成分の寄与は通常無視できるのでこの性質を利用する。

図 14 の桃色の数値は 6 ケ所のフォールアウト場での全線量率である。縦軸はそれぞれの 場所での "見かけの"自然線量率、すなわち人工成分が混入した K (ビン番号 33), U (37), Th (46) の計数率から算出した線量率を意味する。これら"見かけの"自然線量率は図中の 経験式よりかなりが高めに出る。Site B は 2011 年 3 月 17 日に測定されたため I-132 の寄 与が含まれるので、"見かけの"自然線量率が相当高めに出る。Site B 以外では I-132 の影 響が無視できる時期に測定されている。



文 献

- 1) Minato, S., Kawano, M. (1970) Evaluation of exposure due to terrestrial gamma-radiation by response matrix method, Journal of Nuclear Science and Technology, 7: 401-406.
- 2) 湊 進(1978) 環境 y 線解析用 3" φ x 3" NaI(Tl)シンチレータのレスポンス行列、名古 屋工業技術試験所報告、27: 384-397
- 3) Beck,H.L., DeCampo,J. and Gogolak, C., (1972) "In situ Ge(Li) and NaI(Tl) gammaray spectrometry", USAEC Report HASL-258, New York, N.Y. 10014
- 4) ICRU Report 53 (1994) Gamma-ray spectrometry in the environment, International Commission on Radiation Units and Measurements, 7910 Woodmont Avenue Bethesda, Maryland, USA.
- 5) Minato,S. (2001) Diagonal elements fitting technique to improve response matrixes for environmental gamma ray spectrum unfolding, Radioisotopes, 50: 463-471.
- 6) 松田秀晴、古川滋子、上西時司、湊 進(1982) 3" φ x 3" NaI(Tl) シンチレーションス

ペクトロメーターによる微弱漏洩 γ線線量率評価の新しい方法(第1報)バックグラウンド推定法の原理、名古屋工業技術試験所報告、31:132-146.

7) 湊 進(1977) **降雨時の環境 y 線変動の解析**、名古屋工業技術試験所報告、26:190-202.

8) Minato,S. (2012) Application of a 60x60 response matrix for a NaI(Tl) scintillator to fallout from the Fukushima reactor accident, Radiation Emergency Medicine, 1: 108-112.